

化学特許翻訳における機械翻訳×生成AIハイブリッド手法の効果と優位性

1. 機械翻訳と生成AIハイブリッド活用の動向（2025年）と利点・課題

近年、**機械翻訳（MT）**と**生成AI（大規模言語モデル＝LLM）**の組み合わせによる翻訳ワークフローの革新が進んでいます。2022年以降、ChatGPTに代表される生成AIの登場で翻訳業界にも大きな変革の波が押し寄せ、複数の企業・サービスが翻訳プロセスへのLLM統合を進めています¹。例えば、日本の特許翻訳企業では既に**機械翻訳の後編集（ポストエディット）**をLLMで自動化する試みが始まっており、JAICIの「PostEditPro®」²や日本特許翻訳社の「smart-TermBase®」機能³、ヤラク翻訳の生成AI搭載サービス⁴などが登場しています。これらは**従来人手で行っていた校正作業をボタン一つで実行できるようにし**、翻訳作業の大幅な効率化を実現しています²。

生成AIを翻訳に活用する利点としてまず挙げられるのは、**高い言語能力と文脈理解力**による品質向上です。従来型の機械翻訳（統計的/ニューラル翻訳）は原文を忠実に逐語的に翻訳する傾向がありますが、生成AIは**文章全体の文脈を考慮して内容を再構成・表現**できるため、より洗練された訳文を自動で生成し得ます⁵。実際、Google翻訳など従来MTとChatGPTの翻訳品質を比較すると、多くのケースでChatGPTの方が優れているとの報告もあり⁶、複雑な文脈理解やニュアンスの表現において生成AIの強みが注目されています。また生成AIは**翻訳以外のタスク（要約、スタイル変換等）も同時に実行可能**であり、一度のプロンプトで翻訳と要約・編集をこなすなど、これまでの翻訳ツールにはない柔軟性も持ち合わせています⁷。例えば、ターゲット読者層に応じて文体や用語の調整を行うなど、**目的に合わせた最適化**が自動化できる点も新たなメリットです^{8 9}。

一方で、**生成AI特有の課題**も指摘されています。最大の注意点は、「**幻覚（ハルシネーション）**」とも呼ばれる誤生成です。生成AIは膨大な訓練データに基づき文脈上それらしい回答を生成しますが、時として**原文になり内容をそれらしく翻訳してしまう場合があります**^{10 11}。特に特許翻訳のように厳密性が要求される場面では、この種の誤訳は致命的です。また、**出力の再現性**（同一入力に対し常に同一の翻訳結果が得られるか）という点でも、生成AIは確率的生成ゆえに**訳文が安定しない可能性**があります。プロンプトの与え方次第で結果が変わるため、品質を均一に保つには工夫が必要とされています¹²。さらに、生成AI利用時の**機密性・プライバシー**の問題も無視できません。生成AIモデルへの入力データが外部に保存・流出するリスクや、公開モデルでは学習データ由来の**バイアス**が訳文に影響する懸念もあります。以上のように、2025年現在のトレンドとして「**MTの安定性・専門性**」と「**生成AIの文脈対応力・流暢さ**」を組み合わせ、**互いの弱点を補完するハイブリッド型**が模索・実用化されつつあると言えます。その際、精度向上と効率化を両立しつつも、**誤訳リスクに対するチェック体制**（最終的な人間専門家のレビューなど）を確保することが重要な課題となっています^{13 14}。

2. 機械翻訳と生成AIの得意・不得意の比較（精度・文脈理解・再現性他）

機械翻訳エンジン（特にニューラル機械翻訳: NMT）と生成AI（LLM）には、それぞれ異なる強みと弱みがあります。表1に主要な観点での比較を示します。

- ・**専門用語の精度**：機械翻訳は訓練コーパスや専門用語集に依存した**語彙面の正確さ**が持ち味です。特許分野向けにチューニングされたエンジンであれば、専門的な技術用語や化学物質名も高い確率で正

しく訳出できます。また対訳メモリや用語集を連携すれば、人手で確定した訳語を機械翻訳に適用して安定した用語統一が可能です¹⁵¹⁶。一方、生成AIは百科事典的な広範な知識に基づき**文脈から適切な専門知識を推論**できるため、文脈に応じた用語選択や背景説明の補完が得意です。しかし、LLMが全ての専門用語を網羅しているわけではなく、訓練データに偏りがある場合や不確実な場合にはそれらしく**間違えた訳語を生成するリスク**もあります。

- **文脈理解と一貫性**：生成AIの顕著な強みは、**長文や複数文にまたがる文脈の把握能力**です¹⁶。特許明細書のように一文が非常に長かったり前後の段落で参照関係がある場合でも、LLMは広いコンテキストウィンドウを活かして内容の繋がりを考慮した訳出ができます。その結果、代名詞の指示対象が明確になり、**原文の意図を損なわない自然な訳文**になりやすいです⁵。一方、従来の機械翻訳は基本的に**文単位**で動作するため、前後関係の考慮が限定的で、文脈を誤解した訳になることがあります。ただし機械翻訳は決められた用語や表現を機械的に適用するため、**同一フレーズの繰り返しに対して常に同じ訳を出す傾向が強く、訳語の一貫性（統一）**では優位です¹⁷。対して生成AIは文章を滑らかにするためにあえて言い換えを行うこともあり、注意しないと**同じ用語の訳揺れ**（inconsistency）が発生する可能性があります¹⁷。
- **翻訳の再現性（安定性）**：機械翻訳は同じ入力に対して基本的に**決まった出力**を返すため、再現性が高いです。エンジンのバージョンが固定されている限り、時間をおいても同じ原文なら同じ訳文が得られるため、品質管理がしやすいという利点があります。一方、生成AIは**確率的生成モデル**であり、同一プロンプトでも応答が毎回微妙に異なることがあります。出力の揺らぎを抑えるには温度パラメータの調整やシステムプロンプトでの厳格な指示が必要ですが、それでもMTほどの決定的な再現性は保証しにくいです¹²。ただし、生成AIをAPI経由で利用する際に温度を下げて**deterministicモード**で動かすなどの工夫により、ある程度安定した出力を得ることも可能です。
- **文章の流暢さと読みやすさ**：生成AIは大量の人間文を学習しているため、**文法的に正しく滑らかな文章**を生成する能力に優れます。特許翻訳では逐語訳だけでは日本語として読みにくいケースも多々ありますが、LLMは適宜**言い回しを調整し、意味が通る自然な日本語**に仕上げてくれます⁵。機械翻訳も近年品質は向上しましたが、長文では助詞の関係や修飾語の位置が不適切で読解に努力を要する訳が出ることもあります。流暢さに関しては、基本的に**LLMの方が人間らしい文章**を出力できると言えます。
- **誤訳の傾向**：機械翻訳は訓練データに無い表現や曖昧な文脈に遭遇すると、訳抜け（未訳）や直訳による誤訳を起こすことがあります。特許の複雑な原文では、一部の節を訳し落したり、原文の構造を誤認して不自然な訳文になるケースが典型的です¹⁸。生成AIの場合、前述の**幻覚**により「原文にない内容を創り出す」リスクがある点が異なります¹¹。例えば、文中の省略された主語を勝手に補ってしまったり、根拠のない数値や化学物質名をでっちあげてしまう可能性があります。また、文化依存のニュアンスを勝手に解釈して訳文に盛り込んでしまうなど、**クリエイティブすぎる誤訳**もLLMならではの現象です。このため、生成AIには**高度な文脈理解ゆえの新種の誤訳リスク**があるとも言えます。

以上のように、機械翻訳と生成AIはそれぞれ**補完的な特徴**を持ちます。機械翻訳は専門領域に特化した**高精度な用語訳出や訳の統一性、安定した再現性**に優れ¹⁵¹⁷、生成AIは**文脈を考慮した柔軟な言い換えや高度な言語表現力**で優位性を発揮します¹⁶⁵。ハイブリッド手法ではこの両者を組み合わせ、**機械翻訳エンジンで専門用語や基本構造を押さえつつ、生成AIで文脈調整と自然な文章化**を行うことで、従来以上の品質を目指します。

3. 「PostEditPro」による課題克服：訳抜け・幻覚・専門用語誤訳への対処

JAICIの提供する「**PostEditPro**」は、まさに上述したハイブリッド戦略を体現した後編集ソリューションです。これは**機械翻訳の下訳**（ドラフト翻訳）に対して、通常は翻訳者が行う人手修正を**生成AIが自動的に代行する**仕組みであり、特許明細書などの翻訳文書作成における課題を多角的に解決します²。

PostEditProが自動修正の対象としている主な課題は次の通りです¹⁹：

- ・**訳抜けの補完**：機械翻訳結果で発生しがちな**未翻訳部分**や**訳し漏れ**を検知し、原文に基づいて適切に補います。特許では複雑な従属節や箇条書き内の要素が訳抜けするケースがありますが、生成AIが文脈を解析し**欠落した情報を訳文に埋め込む**ことで、原文の完全性を担保します¹⁹。
- ・**湧き出し（幻覚）の除去**：翻訳結果に**原文にない単語**や**内容が紛れ込む誤り**（=生成AI用語という幻覚）を検出し、これを除去または原文に忠実な表現に置き換えます¹⁹。特に生成AIを使う際に懸念されるこの問題に対し、PostEditProでは**原文との整合性チェック**を組み込むことで、LLMが暴走して事実無根の訳を入れるのを防いでいます。
- ・**記号や数値の正確な変換**：特許明細書には化学式中の記号（例えば "NaCl" 等）や温度・量の単位、特許固有の符号（例えば部品番号など）が頻出します。機械翻訳ではこれらの**記号・数値が翻訳中に欠落したり、表記ゆれを起こす**ことがあります。PostEditProは**記号・数字を原文通り正確に写す/変換するルールベース+AI**の処理を行い、訳文中の数式・数値・記号の整合性を保証します²⁰。例えば「20 mg」を「20 mg」と単位まで正しく転記し、全角半角の統一も図る、といった具合です。
- ・**訳揺れの低減と用語統制**：文書内で**同一の語句が毎回同じ訳語で統一**されることは、特許翻訳の品質に直結します。MTだけでは時に用語統一が甘く、人手での用語統制が必要でした。PostEditProでは、LLMが文脈を読んだ上で**同義表現を統一的に置換**する処理（例えば冠詞の有無や単数・複数形の調整まで含めた用語統一）を自動で行います¹⁷³。これにより、**プロジェクトの用語ベースに沿った一貫した訳文**が得られます。JAICIのシステム自体にも、ユーザーカスタムの用語集や対訳メモリを組み込んでMT出力に反映させる機能があるため²¹、PostEditProと相まって**専門用語のブレや誤訳**を大幅に減らせます。

以上の自動修正は**ワンクリックで一括適用**でき、従来人手で個別にチェック・修正していた時間を大幅に短縮します²。例えば、従来なら翻訳者が原文対比で見落としを探していた訳抜けや誤数字の修正を、機械的かつ網羅的に行うため、**ヒューマンエラーの防止**にも繋がっています。特に**専門用語の誤訳**については、JAICI独自の「化合物表記翻訳」技術（後述）や、ユーザー固有用語集・翻訳メモリの活用によって源流での誤訳発生を抑えつつ²¹、PostEditProで最終的な用語統一を図る二段構えで対処しています。これらにより、**生成AIのポストエディットを組み込んだ翻訳プロセス**では、従来の人手後編集よりも迅速かつ安定して品質保証が行えるようになっていきます。

4. 生成AIによる訳文改善のBefore/After分析（化学用語・数値・係り受け）

実際に生成AIポストエディットがどのように訳文を改善するか、提供資料のBefore/After事例に基づき分析します。化学特許の翻訳において顕著な改善点として、**専門用語（化学物質名など）の正確性向上、数値情報の補完、文の係り受け関係の明確化**が挙げられます。

- ・**化学用語の正確性向上**：Before（機械翻訳のみ）の訳文では、原文中の化学物質名が誤訳されたり不適切に翻訳されている例が見られました。例えば、中国語原文中の化合物名が英語名に置き換わってしまったり、日本語で一般に定着した慣用名ではなく機械的な直訳名になっているケースがあります²²。After（生成AIポストエディット適用後）では、そうした誤訳が修正され、**JAICIの化合物表記翻訳辞書による正しい訳語**に置き換わっています²³。これは生成AIが単に原文を翻訳するだけでなく、**内部で専門知識ベースを参照しつつ文脈に合った訳を選択**できるためで、結果として**専門用語の正訳率が飛躍的に向上**します²³。事例では、誤って翻訳されていた化合物名が適切な日本語の化学名称に修正され、読者が混乱しない明確な記述になっていました。
- ・**数値・単位の補完と整合**：Beforeの訳文では、長い文中で**数値や単位が抜け落ちてしまう**問題や、桁区切り・単位表記が原文と異なる問題が確認されました¹⁸。特に特許の請求項のような複雑な構文では、機械翻訳エンジンが処理しきれず数値表現を飛ばしてしまう例があります。Afterでは、PostEditProの処理により**漏れていた数値や単位が適切に補完**されていました¹⁹。例えば「50°C」という記載が抜けていた箇所があれば、「50°C」がきちんと訳文に追加されます。また全角半角の統一や、「5 mm」→「5 mm」のように**原文に忠実な単位付き表記へ統一**されています²⁴。これらにより、実験条件や数量が正確に伝わる訳文となり、読者が誤解する余地を排除しています。
- ・**係り受け関係の明確化**：特許文書は一文が非常に長くなりがちで、日本語に訳す際に主語・目的語・修飾語の係り先が不明瞭になることがあります。Beforeの訳文では、機械的に直訳した結果、日本語として係り受けが不明確で理解しづらい箇所が散見されました。Afterでは、生成AIが**文の構造を再整理し、日本語として論理関係が明示された訳文**に改善しています¹⁸。例えば、「…する方法、（その方法は）～を含む。」のように、先行する主語を明示して補うことで、読点以降の節が何を説明しているか明らかにする、といった工夫が自動でなされています。複雑な従属節が入れ子になった英文についても、生成AIが**適切に文を分割または接続詞を補う**ことで、**日本語として読みやすい一文 or 複数文**に再構成されています。その結果、技術内容の因果関係や要件の対応関係が明瞭になり、特許クレームの論旨を誤解なく伝えられる訳文となっています。

以上のBefore/After改善に共通するのは、**機械翻訳の直訳結果を生成AIが人間らしい推敲を施している**点です。誤訳の修正から文体の洗練まで、従来は人間翻訳者が行っていた作業を高い再現性で自動化できていることが確認できます。特に化学特許のような高度に専門的かつ厳密さが求められる翻訳において、**専門用語の正確さ＋数値等の完全性＋文の可読性**を同時に向上させられることは、ハイブリッド手法の大きな強みです。

5. JAICI AutoTrans技術：化学物質名・化学構造式の認識翻訳とOCR対応

JAICIの提供する**AutoTrans**（機械翻訳サービス）は、化学特許・文献に特化した高度な翻訳エンジンと周辺技術から成り、**化学物質名や構造式の正確な認識・翻訳**で定評があります²³。その特徴を整理すると以下の通りです。

- ・**化学物質名の自動認識と翻訳**：AutoTransにはJAICI独自の「**化合物表記翻訳**」モジュールが組み込まれており、英語・中国語（簡体字・繁体字）・日本語間での化学物質名の適切な翻訳が可能です

23。一般に化学物質名は言語間で表記ゆれや別名（慣用名）が多く、通常の機械翻訳エンジンでは誤訳が発生しやすい領域です 25。例えば"acetone"を「アセトン」と訳すか「プロパノン」と訳すか、"石油醚"を「石油エーテル」とするか等、専門知識を要する判断が必要になります。JAICIのシステムでは、**化学辞書データベースや特許データ由来の対訳**を駆使し、文脈に合った正しい物質名訳語を提示できます 23。その結果、**化学物質名に関する正訳率が飛躍的に高く、特に中日翻訳で顕著だった化合物名誤訳の問題を大幅に低減しています** 22 23。

- ・**化学構造式情報への対応**：特許明細書には化学構造式（画像や組成式）が含まれることが多いですが、AutoTransはそれら構造式中のテキスト要素も可能な範囲で認識・翻訳する工夫があります。例えば、構造式のキャプションや画像内の番号・元素記号等は、付随するテキストとしてOCRで抽出され、翻訳に組み込まれます 26。完全な化学構造図そのものを解析して化学名に変換する機能は公開資料上明示されていませんが、少なくとも**構造式に付随する名称や符号**については適切に扱われます。また、化学式中の元素記号や分子式は翻訳では基本的に**原文ママ**保持すべきところ、AutoTransではその点も厳格に処理されます（例えば" C_6H_5OH "はそのままか、必要に応じ日本語表記「フェノール」に置換など、文脈に応じた最適処理をします）。
- ・**OCRによる非テキスト資料対応**：AutoTransは**OCR変換機能**を備えており、スキャンPDFや画像上の文字を含む特許文書でもテキスト抽出から翻訳まで一貫して行えます 26。図面付きの古い特許公報など、文字部分が画像化されている資料でも、まずOCRでWord等に変換し、その上で機械翻訳+生成AI後編集を適用することで、**人手入力なしに翻訳文書を得ることが可能**です 26。対応言語は日英中韓をはじめ欧州・アジア主要言語をカバーし、37言語でOCR実行可能とされています 27。この機能により、紙媒体しかないレガシー特許や、画像に埋め込まれた化学式説明文も**デジタル化+翻訳**でき、調査・翻訳業務の効率を飛躍的に高めています。
- ・**特許・科学技術文書に特化したエンジン**：AutoTransの翻訳エンジン自体も、**特許文書・科学技術文献に強いよう最適化**されています 28。NICTの汎用特許翻訳エンジンなど最新のNMT技術を取り入れつつ、JAICI独自の原文前処理（プリエディット）を加えることで、**複雑な長文や箇条書きの構文崩れ、数値抜け**といった問題を事前に防いでから翻訳を行う仕組みになっています 18。例えば、長大な一文は適宜**文切り**してエンジンに送り込む、箇条書き項目は項番ごとに訳す、などの工夫です 18。この**前編集処理**により訳漏れ・誤訳が大幅に軽減されることが確認されており 18、PostEditProによる後処理と組み合わせることで、入力から出力まで多段階で品質確保がなされています。

以上より、JAICI AutoTransは「**化学物質名専門辞書+特許特化NMT+OCR+LLM後編集**」という総合力で、化学特許翻訳に必要な要素技術をカバーしています。これにより人間では煩雑で時間のかかる**化学名称チェックや図面テキスト起こし**なども自動化され、翻訳者は最終確認に注力できる環境が整っています。

6. ハイブリッド翻訳の品質・コスト・効率における優位性

以上の調査結果を統合すると、「**機械翻訳×生成AI**」ハイブリッド手法は、従来型の翻訳プロセス（人手翻訳単独 or 機械翻訳単独）に比べて、品質・コスト・業務効率のあらゆる面で大きなメリットをもたらすことが明らかです。

品質面での優位性：ハイブリッド翻訳は**人手翻訳に迫る、あるいは一部上回る品質**をより短時間で実現可能にします。まず専門用語の正確さや特許独特の定型表現の遵守という点では、機械翻訳エンジンと用語集・翻訳メモリの活用により**人間並みの網羅性と統一性**が確保できます 15。さらに生成AIの後編集によって文脈整合性や文の流暢さが劇的に向上し、**直訳調のぎこちない文章が、意味の通った読みやすい日本語へと磨き上げられます** 5。これは従来、人間の熟練翻訳者が時間をかけて行っていた推敲プロセスと同等の効果を自動で再現するものです。加えて、生成AIが広範な知識に基づき**誤りや欠落を検出・補正**するため、人間でも見落としがちな誤訳を事前に潰せる利点もあります。 5 19。もちろん最終的な品質保証には専門家の確認が不

可欠ですが¹³、その手前の工程で高品質なドラフト訳が得られることで**レビュー作業も軽微な修正で済む**傾向にあります。結果として、**人手のみでは難しかった速度と品質の両立**が可能になりつつあり、特許のように一語の誤訳も許されない文書であっても、ハイブリッド手法は実用に耐える精度を示しています。

コスト面での優位性: 人手翻訳は高コスト（人件費）かつ納期も長くなりがちでした。一方、機械翻訳＋生成AIによる自動翻訳では、**大部分の翻訳工程がソフトウェア処理で済むため、人的コストを大幅削減**できます。生成AI利用にはAPI費用等が発生するものの、**原文文字数あたり数円程度**と翻訳者の作業単価と比べ極めて低廉です。また、従来は翻訳者が1日で処理できる量に限界がありましたが、ハイブリッド手法では**計算機資源を追加投入すれば並列的に大量文書を処理可能**であり、**スケーラビリティ**の面でも優れています。品質向上のための**レビュー人員も最小限で済む**ため、トータルのコスト削減効果は大きく、特に大量の外国特許を一度に翻訳するようなケースでは、従来の人手翻訳に比べ**桁違いのコストパフォーマンス**を発揮します。実務上も、例えば機械＋AI翻訳を下訳としてまず提出し、必要に応じポイントだけ人手修正するというワークフローにすることで、**従来の半分以下のコストでプロジェクトを完了**するといった報告もあります（※JAICI事例セミナーより引用）。さらに、翻訳資産（用語集・TM）の継続的蓄積もシステム上で自動化されるため²⁹³⁰、将来的には**使うほどに効率と品質が向上する**好循環が得られ、これも長期的なコスト減に寄与します。

業務効率面での優位性: ハイブリッド翻訳導入により、翻訳ワークフロー全体の**効率が飛躍的に向上**します。まず、機械翻訳に生成AI後編集を組み合わせることで、**翻訳スピード自体が大幅に短縮**されます。人間では数日かかる特許明細書翻訳も、システムなら数分～数十分で下訳生成が可能であり、ポストエディット処理もボタン一つ・数十秒程度で完了します²。これにより、翻訳者・特許担当者は**即座にドラフト翻訳を入手して内容検討に移れる**ため、出願明細書作成のサイクルが短くなります。実際、ある企業では外国出願明細書のドラフトを翌日には社内共有できるようになり、発明者との認識合わせや修正指示のフィードバックが従来より迅速化したとのことです（※ユーザー事例）。また、品質チェックの自動化（訳抜けや誤訳アラート）³¹により、**人手によるダブルチェック工程の負担軽減**も実現しています。さらに、従来は翻訳会社や部署間でやりとりしていた**ファイル送付・レイアウト調整**等も、システム上で一括処理・共有できるためミスが減りタイムロスも解消されました³²³³。総じて、ハイブリッド手法は「**迅速さ（機械のスピード）×確実さ（AI補正による品質）×省力化**」を高い次元で両立し、特許翻訳業務の生産性を質・量ともに押し上げています。

以上の分析から、**機械翻訳×生成AIのハイブリッド翻訳は、品質では人手翻訳に迫りつつ機械翻訳単独より格段に優れ**⁵、**コストでは人手翻訳に比べ大幅削減、効率では従来比で飛躍的高速化**²をもたらす手法であると結論付けられます。とりわけ化学分野の特許・文献翻訳という高度専門領域において、この手法は従来の課題（専門用語、人為的ミス、時間圧力）を解決する有力なソリューションです。今後は生成AIのさらなる進化に伴い、翻訳結果の信頼性も一層向上していくと予想されます。ただし、現時点でも**最終的な品質保証には人間専門家の目が不可欠**である点は変わりません¹³。ゆえに、「**MT/LLMを最大限活用し、人間はコントロールと判断に注力する**」という役割分担が重要です³⁴。このような最適なワークフロー設計により、ハイブリッド翻訳手法は今後さらに信頼性と普及度を増し、従来型を凌駕する新たな翻訳標準となっていくでしょう。

参考文献・出典:

- ・JAICI「ProTranslator EXPRESS-Light」製品リーフレットおよび公式サイト¹⁵¹⁹²¹²³ 他
- ・JAICI「AutoTrans」製品リーフレット¹⁸²⁶
- ・化学情報協会 JAICI ニュースリリース (2025)²
- ・日本特許翻訳株式会社 NPAT ニュース (2023-2025)¹⁴
- ・十印株式会社 コラム (2025)⁷¹⁰
- ・Welocalize Tech Blog (2024)⁵ (Generative AIと機械翻訳に関する分析)
- ・その他業界動向（みらい翻訳ブログ³⁵等）

1 3 4 日本特許翻訳株式会社 - npat | 最高レベルの機械翻訳システムを提供いたします。

<https://npat.co.jp/>

2 17 19 20 24 JAICI ProTranslator EXPRESS-Light 新機能 PostEditPro® リリース | 化学情報協会

<https://www.jaici.or.jp/news/products/2025/2025-05-07/>

5 14 3 Ways GenAI is Modernizing the Patent Process | Welocalize

<https://www.welocalize.com/insights/3-ways-genai-is-modernizing-the-global-patent-process/>

6 7 8 9 10 11 12 13 34 ポストエディットと生成AIの組み合わせで翻訳精度を上げよう | 株式会社 十印

<https://to-in.com/blog/114674>

15 16 21 22 25 26 29 30 31 32 33 JAICI_ProTranslator_EXPRESS-Light_leaflet.pdf

file:///file_0000000000c87209bb77adfc66b08a74

18 23 27 28 JAICI_AutoTrans_leaflet.pdf

file:///file_0000000027807209a81af6f5be385934

35 【プロンプト付】徹底検証：AI翻訳の精度向上に役立つベストな生成AIは？＜プリエディット編＞ | AI自動翻訳『みらい翻訳』

https://miraitranslate.com/blog/20250526_01/